

心豊かな世代が育つ 童話の里づくり 404

—シリーズ— あなたの人権・わたしの人権

「偏見の目ではなく」

森中学校1年

久我 桜子

「事件がない日などは一日たりとも
ない」

これは、私が日々テレビを見る中で
感じていることだ。

いつもいろいろな人が罪を犯し、い
ろいろな人が傷ついていて、それを見
るのが日常となっている。
インタビューなどを聞くと、「どう
してこんなことを」などと言つて多く
の人が批判している。
社会において許されないことをした
のだから、それは当然の反応である。
でも、多くの人はその背景を考えよう
とはしていないのではないだろうか。

しかし、残念なことに勝手な偏見
で、人の価値を決めつけている人がた
くさんいるのが現状である。
また、罪を犯した人が再び社会に
戻ったとき、同じ過ちを犯してしまう
ことも多いと、ゲストティチャーリーの方
が言つていた。

先日、道徳の時間に「保護司」とい
う仕事をしている人がゲストティ
チャーリーとして授業をしてくれた。

その時に「出来不出来は問わない。

「居場所がない」「職がない」「頼れ
る人がいない」といったことが理由だ
そうだ。

の力だけではとても難しいことだと私は思う。
本来ならば、みんなで助け合って生きいくといったところが、「犯罪者」という偏見をもたれることにより、助けよう協力しようという人が少なくなってしまったのだろう。
居場所や職などは、人と人との関わりで築いていくものだと思う。
犯罪から更生しようとする人を支えていかないと、いつまでたっても同じことの繰り返しだ。
私たちがいろいろな人を受け入れていくことで、罪を犯した人も社会復帰を果たし、新しい人生を歩んでいける。
世の中の一人ひとりが助け合い協力したりして、それぞれの居場所を持てるようにしていかなければならない。
今回の授業を通してそう感じた。

変われる人、変わろうとする人が素晴らしいのだ」と、その人は言つていた。
それでは、「罪を犯した人は悪い人」という偏見を持っていた人も多くいただろう。でも、私はこの言葉を聞いて、本当にそのとおりだと強く感じた。

たとえ罪を犯した人でも「変われる人」「変わろうとする人」であれば、それだけでも素晴らしいのだと思った。

みんなが偏見を持たず、人と関わることは悪いとはつきり言える人になりたい。そのためにも人に対しても偏見をもつことなく、その人自身をしっかりと見つめて関わっていくことが必要であると思う。

みんなが偏見を持たず、人と関わつていけば「明るい社会」も遠い世界のことではなくなると思う。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。
また、みんなの投稿もお待ちしています。
わたしたちをとりまく様々な不合理や差別性について気づいたことや感じたことを一、二〇〇字程度にまとめて、住所、氏名、連絡先電話番号を記入して（匿名も可）、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの権・わたしの権」までお届けください。

